

## 抄 行一念義

一．題意 ここでは伝統教学（ご常教）による。業因門では、僅か一声に無上大利を得るとする。

他力の念仏は、彼仏名号を聞くことを得た信後の既に初一声に無上大利を得るので、自力の行法を積まねばならない諸行に超え優れる最勝易行の法である。

二．出拠 抛り所のご文である。

(一)「行文類「行一念釈」(全 2-34、註釈版 P187)(一)(二)は続いている。この二文で十分と思われる。

凡就<sub>二</sub>往相回向行信<sub>一</sub>、行則有<sub>二</sub>一念<sub>一</sub>、亦信有<sub>二</sub>一念<sub>一</sub>、言<sub>二</sub>行之一念<sub>一</sub>者、謂就<sub>二</sub>称名遍数<sub>一</sub>、顯<sub>二</sub>開選択易行至極<sub>一</sub>

(二)「行文類「行一念釈」引文「大経」巻下流通分、弥勒付属(全 2-34、註 P187、P81)

其有<sub>レ</sub>下得<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>、彼仏名号<sub>一</sub>、歡喜踊躍、乃至一念<sub>上</sub>。當<sub>レ</sub>知、此人為<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>大利<sub>一</sub>。則是具<sub>二</sub>足無上功德<sub>一</sub> 行の一念の遍数釈に続く弥勒付属の引文である。

(三)「一念多念文意 十章」(全 2-611、註釈版初 P685) 大経巻下弥勒付属の文言の註釈

「乃至」は称名の遍数の定まりなきことをあらはす。一念は功德の極まり、一念に万徳悉く備わる、よろづの善みなをさまるなり。・・(中略)・・如来の本願を信じて一念するに、必ず求めざるに無上の功德を得しめ、知らざるに広大の利益を得るなり。

(四)「行文類」行一念釈 結嘆「いま弥勒付属の一念はすなはちこれ<sup>いっしょう</sup>一声なり」(全 2-35、注 P189 脚注)

三．釈名<sup>しゃくみょう</sup>：「釈名」とは、名目(教義概念)を解釈する意、教義概念規定をいう。文言の定義である。

「行」とは、造作・進趣をいう。浄土真宗の「行」とは、「大行」をいう(「行文類」)。

「行の一念」とは、信後の初一声(伝統教学)、または僅か一声(業因門)をいう。

四．義相 伝統教学では飽くまで信前行後の次第で語る。本質は説筆次第と考えられるものの成程弥勒付属文は聞前念後である。

(一)為得大利(弥勒付属の御文)の所顯

ア)他力の念仏は、彼仏名号を聞くことを得た信後の既に初一声に無上大利を得る。

イ)よって、自力の行法を積まねば功德を増し得ない諸行の法に超え優れる。

(二)行の一念と信の一念

「信の一念」は、信心初発の時に往因満足する義を言い、「行の一念」は、名号が衆生の称名となる信後の既に初一声に無上大利を得ることを言う(伝統教学)。

(備考) 業因門では、初一声ではなく、わずか一声に無上大利を得ると見る。宗祖は成就文を信の一念とご覧遊ばず点で法然聖人と異なる。覚如・蓮如上人は弥勒付属を信の一念とご覧になる点で宗祖と異なる。弥勒付属、一念多念文意では確かに聞くことが先にあるから信前行後ともいえるが、これは説筆次第ではないかと思われる。覚如・蓮如上人の説がその証拠ではないだろうか。

五．結び 業因門では、ただひとこゑの称名に大利を得るとみる。

他力の念仏は、彼仏名号を聞くことを得た信後の既に初一声( )に無上大利を得ることができ、自力の行法を積まねばならない諸行の法に超え優れる。

以上